

2022年3月27日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エレミヤ書 31 : 31～34

ルカによる福音書 22 : 14～20

「新しい契約」

<過越の食事>

15 節にはこうあります。「イエスは言われた。『苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。』」

今日の聖書箇所は、イエスさまと弟子たちの「過越の食事」の場面です。

過越の食事とは、「過越祭」というお祭りの時に、家族で囲む食事のことです。

遠い旧約聖書の時代、イスラエルの民がエジプトで奴隷にされていた時、神さまがエジプトに災いを下し、イスラエルの民を奴隷の家から解放し、脱出させて下さったという、救いの出来事がありました。

その、エジプトに災いを下す時に、神さまはイスラエルの民に、小羊を屠ってその血を家の入口に塗っておくように命じられました。そうすると、血を塗った家を災いが過ぎ越して、その家の者は誰も死なずに済んだのです。そうして神さまは、イスラエルの民をエジプトから解放し、救い出して下さいました。

この救いの出来事を記念するために、イスラエルの民は、毎年この「過越祭」を大切に守り続けてきたのです。

イエスさまと弟子たちは、エルサレムでこの過越祭の時を迎えました。イエスさまと弟子たちもまた、イスラエルの子孫であり、ユダヤ人ですから、当然このお祭りを守ります。

前回の聖書箇所では、この過越の食事を、イエスさまご自身が準備なさったことが示されていました。そうして、イエスさまは弟子たちと共に席に着き、いよいよ食事をしようとしておられる。今日はそのような場面から始まります。

しかし、これはいつもの過越の食事ではありませんでした。

この時イエスさまは、この過越の食事に、新しい、特別な意味を与えられたのです。

この過越の食事は、イエスさまが十字架に架けられる直前に行われました。イエスさまと弟子たちにとっての最後の食事、まさに「最後の晩餐」だったのです。

そして、このイエスさまを囲んでなされた「最後の晩餐」は、今もわたしたち教会が与り続けている「聖餐」の食卓の、まさに「始まり」となったのです。

イエスさまの救いに与った者たちが与る、教会の「聖餐」の始まり、原点が、まさにここにあります。この聖餐の食卓を、イエスさまがどのように定め、わたしたちに与えて下さっ

たのか。今日はそのことを、御言葉から聞きたいと思います。

<新しい時代へ>

さて、14 節には、「時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。」とあります。

これまで、イエスさまが選ばれた十二人は「弟子たち」と書かれていました。しかし、今日の場面から、ルカは意図的に「使徒たち」と呼ぶようになります。

それは、ここから、イエスさまが選ばれた「使徒たち」を中心に、新しい神の民、新しいイスラエルが築かれていく。イエスさまを信じる者たちの群れ、キリストの教会が築かれていく。そのような新しい局面が始まったことを示しています。

つまり、この「最後の食事」の場面から、いよいよ神さまの救いの歴史における、大きな転換点に差し掛かろうとしているのです。

それは、神の民イスラエルが、苦しみから解放され、導かれ、救われて歩んできた時代から、その神さまの救いが、世界のすべての人々に対して開かれる、新しい救いの時代が始まるということです。

その新しい時代への転換は、どのようにして起こるのか。それは、イエスさまの十字架の死によって起こります。流される血によって起こります。世界のすべての人々の救い、ここにいるわたしたちの救いが、イエスさまの十字架において、実現することになるのです。

<屠られる小羊>

さて、イエスさまは、15 節でこう言っておられます。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」

イエスさまは、これからご自分が苦しみを受けることをご存じでした。聖書において「苦しみを受ける」とは、「死の苦しみ」、つまり「殺される」ということを意味します。イエスさまは、ご自分がこれから死の苦しみを受けることを覚悟しておられました。

それはまさに、イスラエルの民をエジプトの奴隷から救い出すために、小羊が屠られ、その血が流されなければならなかったように。世のすべての人々を、わたしたちを、罪の奴隷から解放し、救い出すために、イエスさまは十字架に架かり、小羊のように屠られ、その血が流されなければならなかったのです。

出エジプトにおける、神の民の救いの出来事は、やがて来たる、すべての人の救いの実現を指し示す、先取りであったと言えるでしょう。

イエスさまは、これから起こるご自分の十字架の死の意味が、まさに過越に屠られる小羊の死と同じであるということ。十字架で流される血が、人々を解放し、救い出すために、流される血であるということ、ここで使徒たちに教えようとしておられるのです。

<間近に迫る時>

そして、その時は、もう間近に迫っていました。

イエスさまは 16 節でこう言われました。「言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」

ここで言う「神の国」とは、18 節にも出て来ますが、神さまご支配、神さまの救いの恵みが、この世に打ち立てられる時。救いが実現する時、ということでしょう。

そのために、過越しが成し遂げられるまで。イエスさまが小羊として屠られるまで、「わたしは決してこの過越の食事をとることはない」と言われました。

ここは、新しい聖書の訳では「言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまでは、私はもはや二度と過越の食事をすることはない。」となっています。つまり、この過越の食事が終わったら、イエスさまが過越を成し遂げるまで、救いを実現するまで、もう二度と過越の食事をする機会は来ない、ということです。

なぜなら、イエスさまはこの夜が明けたら、もうその日に十字架に架かれるからです。その時は間近に迫っている。イエスさまは、そのことを使徒たちに教えておられます。

18 節も同じです。「言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」

18 節の「神の国が来るまで」。救いが実現する時まで、「わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい」。もうわたしが、ぶどうの実から作ったものを飲む機会はないであろう。これもまた、その時が近づいていることを指し示しているのです。

<聖餐の制定>

そして 19~20 節で、イエスさまは使徒たちに、新しい「過越の食事」を示されました。つまりここで、イエスさまは、「聖餐」を定められたのです。

従来の過越の食事は、色々と言語すべきことや作法が決められていました。ですから今回のようにイエスさまが語られた言葉は、これまででない、まったく新しいことだったのです。

そのことによってイエスさまは、神の民イスラエルが、エジプトの奴隷から解放されたことを記念する過越の食事を、使徒たちから始まる新しい神の民が、イエスさまの死によって罪と死から解放されたことを記念する食事として、まったく新しい意味を与えられたのです。

19 節以下で、イエスさまはいよいよ具体的に、ご自分の十字架の死の意味、流される血の意味を指し示されます。

19 節には、こうあります。「それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。』」

一つのパンが裂かれ、与えられることは、イエスさまの体が十字架において裂かれ、その命がわたしたちのために与えられる、ということの意味をしています。イエスさまが死なれるのは、わたしたちに、その体を与えて下さるためです。本来は、罪のためにわたしたちが死

なければならなかったのに。わたしたちに代わって、わたしたちを生かすために、イエスさまはご自身の体を、命を与え、犠牲となって下さる、ということです。

そして「わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。

この新しい過越の食事は、もはやイスラエルのためになされた、出エジプトにおける救いの出来事を覚え、記念するものではなくて、これから新たに実現する、すべての人のための救いの出来事。つまり、わたしたちのためになされた、イエスさまの十字架の死を記念するために、その意味と恵みを覚え続けるために、行ないなさい、と言われたのです。

<新しい契約>

また、20 節では「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」と言われました。イエスさまの血もまた、「あなたがたのために」「わたしたちの救いのために」流されます。そして、それは「新しい契約」のためと言うのです。

ここで、「契約」という言葉が出て来ます。かつて神さまは、イスラエルの民との間に「契約」を結ばれました。

当時の契約は、動物を二つに裂くことによって結ばれます。それは、この契約を破ったもの、与えられた義務を果たさなかった者は、このように引き裂かれる、ということの意味しています。

あるいは、血の契約といって、動物の血を、契約を結ぶ双方に振りかけます。これもまた、破った者は自分の命を注ぐ、つまり殺される、ということの意味しています。

そのように契約とは、双方が命をかけて結ぶものなのです。

もちろん、神と民が契約を結ぶという時、それは対等な契約ではありませんでした。それはイスラエルを選び、救い出して下さった神さまの方が、一方的に大きな義務と責任を負って下さる、恵みによる契約だったのです。

そしてこの契約は、イスラエルの民を祝福の源として、地上のすべての者たちを祝福する、というアブラハムの約束を受け継いでいました。

そうして神さまの民とされたイスラエルでしたが、彼らは神さまに従うという約束を一方的に破り、神さまに背き、偶像を拝み、罪を重ね続けたのでした。本来、このことによって、イスラエルの民は死ななければならなかったのです。そして、契約のすべては破棄されてもおかしくありませんでした。

しかし、神さまは、それでもイスラエルの民を、そして、造られた全ての者を愛することを、おやめになることはありませんでした。その愛のゆえに神さまは、イスラエルの民に、ご自分の御子イエスさまを遣わして下さり、ただこの方の血を流すことによって、すべての者に罪の赦しを与えて下さると言うのです。そうして、古い契約を超えた、新しい契約を、すべての者に与えて下さると言うのです。

かつての契約は、神さまと、選ばれたイスラエルの民との間に結ばれたものでした。神さまは、この民を御自分の民とし、この民の神でいて下さることを約束して下さったのです。

しかし、イエスさまの血による新しい契約は、民族を超えて、イエスさまを信じる者すべてとの間に結んで下さる契約です。イエスさまに寄り頼み、イエスさまに罪の赦しを求め、イエスさまの救いを信じるならば。神さまはその者の罪を赦し、永遠の命を与え、御自分の民として受け入れて下さる。また、その者の神となって、いつまでも共にいて下さる。そのような契約です。

この契約のために、裂かれたのは、血を流されたのは、神の御子ただお一人でした。

しかし、神さまはそれを良しとされました。わたしたちの罪を赦したい。わたしたちを救いたい。わたしたちを神の民、神の子として、迎えたい。それが、神さまの御心なのです。

わたしたちに求められているのは、ただ、この神さまの恵みを受け取ることです。神さまの招きに応えることです。イエスさまが実現して下さった救いを信じ、新しい契約に与らせていただくことなのです。

<切に願われて>

これが、イエスさまが最後の晩餐で示されたことです。

これから成し遂げられる十字架の死が、神さまの救いを実現するために、過越しに屠られた小羊と、同じ意味を持つこと。

十字架において裂かれるイエスさまの体、流されるイエスさまの血は、わたしたちの罪を贖うために、わたしたちの代わりに受けられる苦しみであること。

そして、イエスさまが流される血によって、すべての者が神さまとの「新しい契約」に招かれているということです。

まず使徒たちが、このイエスさまの新しい過越の食事に与りました。

しかし、十二人の使徒たちが、この食卓に招かれたのは、決してふさわしい者たちだったからではありません。立派で、欠けがなく、信仰深い者など、誰一人いなかったのです。

彼らがこの食卓に着いていたのは、イエスさまが一人一人を選び、お招きになったからです。「わたしに従いなさい」と言って下さったからです。

欠けだらけで、意志も弱く、理解も鈍い者たちです。この食事の直後には、イエスさまを裏切ったり、知らないと言って逃げ出したりする、弱い、罪深い者たちです。

しかしそれでも、イエスさまが選び、招き、罪を赦して下さるなら、誰でもこの聖なる主の食卓に着くことが出来るのです。

わたしたちも同じです。この聖餐の食卓に着くのは、敬虔で、立派で、正しい者だからではありません。すぐに神さまの御心を忘れ、自分のことばかりを考え、すぐにつまずいたり、逃げ出したりする、罪深く、弱い、小さな者です。

でも神さまは、そんなわたしたちを愛して下さいました。愛し抜いて下さいました。その

ためにイエスさまは、この地上に来られ、わたしたちのために、御自分のすべてをお与えになったのです。

罪に捕らわれたあなたのために、十字架にかかった。あなたのために、血を流した。このわたしの救いを受け取りなさい。新しい契約に与りなさい。そう言って救いの恵みを差し出して下さったのです。

この方の十字架の下にしか、救いはありません。罪の赦しはありません。わたしたちは、ただこのイエスさまの救いを、感謝して受け取ることしか出来ないのです。

そしてそれが、洗礼を受けるということです。しかし洗礼は、それを受けたら完成なのではありません。むしろ、そこからが、神の民として歩み始めるスタートなのです。救いへの招きにお応えし、御許に行ったならば、使徒たちから始まった、新しい神の民の一員として、主の食卓、主の聖餐に与り続けていくのです。そこで、イエスさまの罪の赦しを覚えつつ、その救いの恵みに生かされつつ、わたしたちは信仰を養われ、強められ、導かれて、神の民として終わりの日まで歩み続けていくことが出来るのです。

聖餐の中では、「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すこととなります」という言葉が言われます。

時々、「わたしは今週、ちょっと祈りが少なかったし、悪いことをしてしまって、罪を犯したので、ふさわしくないから聖餐に与りません」とか、「あの人の信仰は熱心ではないから、聖餐に与るのはふさわしくない」とかいう人がいます。

しかしそうだとするなら、「わたしは今週はまったく罪を犯しませんでしたので聖餐を受けます」と言えることが、「わたしは信仰熱心だから聖餐に与ります」とか言えることが、果たしてあるのでしょうか。

人は誰一人、神の御前で、ふさわしくなることなど、罪を犯さないことなど出来ません。

大切なのは、神さまがそれでも自分を愛して下さったことを知ることです。自分が、自分では救いようのない罪人であり、ただイエスさまの十字架によって、罪を赦され、救われた者だと知ることです。そうして、悔い改めをもって神さまの御前に立ち、救われた感謝と喜びをもって聖餐を受けることが、まことに「ふさわしい」ということなのです。

この食卓は、イエスさまが切に願って、使徒たちと共にされた食卓でした。

そして、イエスさまは、このわたしたちに対しても、その切なる願いをもって、ご自分の食卓に招いて下さったのです。

わたしたちの、どうしようもない罪の只中に、イエスさまがご自分の血によって、ご自分の犠牲によって、神の国を、神のご支配を打ち立てて下さいました。過越を、救いの御業を、完成させて下さいました。救いの新しい契約を与えて下さいました。

この十字架の下に、救いの下に、恵みの食卓に、イエスさまはすべての者を、招いて下さっています。この聖餐を共にしたいと、切に願って下さっています。

そして、この救いへの招きに応え、イエスさまの御許に集められた者たちによって、この十字架の下に、新しい神の民、教会が、築かれていくのです。

そして、この聖餐の食卓にあってこそ、てんでバラバラの、罪人であるこのわたしたちの群れが、イエスさまにあって一つとされ、共に養われて、良い交わりを築いて、共に歩いていくことが出来るのです。一つのパンを裂かれたことに意味は、まさにそのようにお一人のイエスさまの救いに、共に与っていることをも指し示しています。

イエスさまの「切なる願い」によって、弟子とされ、この食卓に招かれ、席を着くことを許された恵みを、新しい神の民とされた恵みを、わたしたちは今日また、新たにされたいと願います。

そしてまた、この食卓への招きを受けている方は、喜んでそれにお応えすることが出来ますように。

「あなたがたと共にこの食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」イエスさまが切に願って下さったことが、ここにあっても豊かに実現しますようにと祈り願います。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちを救いへと招くために、御子イエスさまの命をお与え下さり、ただ恵みによって、わたしたちと新しい契約を結んで下さることを、心から感謝いたします。

そしてイエスさまが切に、切に願って下さって、わたしたちが、その恵みの食卓に共に着くことを望んで下さいますことを、心から感謝いたします。

わたしのために、神の御子イエスさまが十字架に架かれたこと。わたしたちを罪の奴隷から解放して下さったこと。神と共に生きる者として、新しい命を与えて下さることを、心から感謝いたします。

聖餐の度毎に、思いを新たにされ、恵みを新たにされ、神の民として、わたしたちの信仰をますます養い、育て、導いて下さいますように。

そして、招かれているすべての者が、心から喜んで、感謝して、この恵みを受け取り、洗礼を受け、共に聖餐に与る者となることが出来ますように。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン